

ウクライナ問題に寄せて

N. S. トルベツコイ著
翻訳・解説 芳之内 雄二

キーワード：民族文化論

I

ピョートル改革は、ロシア文化史において二つの時代間に明確な境界を置いている。一見して、ピョートル時代には伝統の完全な断絶が生じたこと、ピョートル時代以降のロシア文化はそれ以前のものとの共通性もなく、何の結びつきもないように思われる。だが、こうした印象は原則として間違っている。一見すると、ある民族の歴史において伝統の明確な断絶が存在する場合に、綿密な調査をすれば断絶の不明確さと二つの時代間の一見目立たない結びつきのあることが大部分は明らかになる。ピョートル時代以降の文化とそれ以前の文化の関係もそうしたものである。周知のように、ピョートル後のロシア文化の時代とそれ以前の時代とを結びつけ、ピョートル改革が彼以前の文化の一定の風潮によって準備されたことを裏付ける一連の現象があることを、ロシア文化史家は常に指摘している。歴史家が指摘するピョートル以前と以降とを結びつけるこれらすべての糸に視線を向ければ、次のように描くことができる状況が目に入るであろう。伝統の明確で完全な断絶があるとすれば、それはロシア文化として念頭に置いている対象が大ロシア文化のケースにのみ限定されている場合であろう。他方、西ロシア文化（とくにウクライナ）では、ピョートル時代に伝統の明確な断絶は生じなかった、なぜなら、このウクライナ文化はピョートル時代以前にモスクワで一定の好意を獲得しつつ浸透し始めていて、ピョートルの文化改革は大ロシアで用意されたと見なすことができるからである。

15-16世紀及び17世紀前半の時代に、西ロシア文化とモスクワ・ルーシ文化は異なる道を歩いたので、17世紀後半には両者の文化差異は極めて大きくなった。しかし同時に、全ロシア結束の現実的意識とビザンチン文化継承の共通意識が存在したために、両者の文化を互いにまったく独立したものと見なすことは許容されず、これら二つの文化を同一共通ロシア文化の異なる2つのヴァージョン（異なる個性）と見なすことが強いられた。ウクライナ併合後はロシア文化のこれら二つの異種を一つに融合する問題が出てきた。ただし、その際問題は、大ロシア民族主義の自尊心にとっても小ロシア民族主義の自尊心にとってもかなり腹立たしい形で提起された。ロシア文化の二つの異

種を融合することよりも、一方を退廃したものとして排除し、他方を唯一自主的で真実のものとして維持しようとの考えが出された。ウクライナ人はモスクワっ子の無知をロシア文化のモスクワ・ヴァリアントの退廃によるものと見なし、モスクワっ子には学校がないことを非難し、学業を自慢した。他方、モスクワっ子はロシア文化のウクライナ・ヴァリアント（一般に西ロシア文化）を異端であるラテン・ポーランドの影響下で退廃したものとした。この議論では双方が同時に正しくもあり間違っていること、大ロシア人は学校を導入する必要があるウクライナ人はポーランド人から借用した多くの特質を捨てる必要があったことを、分別のある人々はたぶん理解していた。だが、分別ある者は少なく、双方の大部分の者は非妥協的な態度をとっていた。そこで事実上問題は、二つのロシア文化のどちらの異種を完全採用し、どちらを完全に排除するかということになった。決定は政府が下すことになった、つまり最終的には皇帝の意思によった。政府はウクライナ人側を支持した、それは政治的観点からすればまったく正しかった。大ロシア人側が抱く当然の不满はもしかすると単に地方的暴動を生むかもしれないが、ウクライナ人の不满は真のウクライナ再合同を今までよりはるかに困難に、あるいは不可能にする恐れさえあった。しかし、ウクライナ人側についてモスクワ政府はロシア文化のウクライナ・ヴァリアントの正当性承認の進路において第一段階を歩んだだけだった。確かに、その第一段階は最重要なものであり、祈祷書の修正（つまりモスクワヴァージョン祈祷書をウクライナヴァージョンに変更）、ニコンの改革案全部が実行された。この分野では完全な宗教統合が遂行され、その際、大ロシア的なものはウクライナ的なものに取って代られた。しかし、残りの文化分野と生活分野ではこうした統合はピョートル時代前には遂行されていなかった。ウクライナではいかなる大ロシア文化の混入もない純粋な西ロシア文化が支配的であった、大ロシアではモスクワ文化と西ロシア文化の混合が支配的であった。その際、西ロシア文化要素の大ロシア文化への混入の程度は社会上層のあるグループ（当時の西欧主義者）ではかなり顕著であったが、他のグループ（当時のモスクワ民族主義者）は、逆に大ロシア的伝統の純度を維持しようと努めた。

ピョートル皇帝はロシア文化の西欧化を目標として掲げた。この課題遂行に有用であるのは、西欧文化の一部要素（ポーランド文化）をすでに吸収し、同一進路での将来の発展傾向を見せる西ロシア文化、ウクライナ文化のみであることは明らかだ。大ロシア文化のほうは逆に、持前の著しい西欧嫌いと自己満足傾向のためこの目標に役立たぬだけでなく、課題遂行の障害とさえなっていた。そこでピョートルは、将来の発展のための出発点となる唯一のロシア文化によってこの大ロシア文化を完全に根絶、絶滅しようと努め、ウクライナ版ロシア文化を作った。

こうして、古くからの大ロシア、モスクワ文化はピョートル時代に亡くなった。ピョートル時代から生き続けロシアで発展している文化は、モスクワ文化ではなくキエフ文化、ウクライナ文化の系統的かつ直接的な継承物である。このことは全ての文化分野で明らかにすることができる。例え

ば、文学を取り上げてみよう。モスクワでも西ロシアでも文学作品、宗教書、学術書で使われている標準語は教会スラブ語であった。だが、この教会スラブ語はキエフでもモスクワでも17世紀までは語彙面でも、統語法と文体面でもあまり類似してなかった。すでにニコン総主教時代に、キエフの教会スラブ語は祈祷書からモスクワの教会スラブ語を排除していた。その後も、同じ排除が他分野文献においても見られる、そこでピョートル時代とそれ以降のスラブロシア標準語の基盤となっている教会スラブ語とは正にキエフの教会スラブ語ということになる。モスクワ・ルーシでは豊かな詩作の伝統があったが、それは主として口頭のものであった。書かれた詩作品で我々に伝わっているものは数が少ないものの、それらによって（例えば、『悲しみと不運の物語』）我々はこの詩作伝統の特性をはっきりと知ることができる。その言葉づかいはかなり純粹で大ロシア的なものであり、若干の教会スラブ語要素の混入が見られ、ある伝統的な作詞上の制約によって潤色されている、作詞法は音節数や押韻に基づかず、大ロシア民謡の作詞法と同一原理に基づくものであった。他方、西ロシアでは別の純粹に文語調の詩作伝統が形成されていた、それはポーランドに繋がるものであり音節数と押韻に立脚する伝統であった。西ロシアのこうした詩作品は、そのロシア上流階層が使用していた話し言葉と実用的言葉であるロシア（正確にはベラルシア）・ポーランド混成語（ジャーゴン）でも、そして教会スラブ語でも書かれていた。大ロシアには、こうした西ロシアの詩作品（もちろん教会スラブ語、つまり当時の共通ロシア標準語で書かれたもの）はすでにピョートル時代以前にも入ってきていた。例えば、セミヨン・ポロツキーのそうした詩作品はよく知られていた。モスクワで、そして地方でさえこの種の詩を模倣する者が出てきた。良く知られているシリベストル・メドヴェージェフの名だけでも挙げておく。ピョートル時代からは、大ロシアの旧型の詩は最終的に民衆の中に埋没した。文化的な意味での社会上層にとって、教会スラブ語を基にした西ロシア音節詩に由来する詩作伝統のみがその後は存在したのであった。散文物語文学作品はモスクワでも西ロシアでも存在したが、西ロシアではポーランドの圧倒的な影響下にあったため独自の創作発展は許されず、物語作品はほぼすべて翻訳ものであった。モスクワでは中編散文作品の自立的伝統が存在し、それはちょうど17世紀に特に確かなものとなり将来の発展に希望を与え始めた（例えば、「サーヴァ・グルツインの中編」）。同時に17世紀全体を通じて西ロシア翻訳物語はモスクワロシアに大量に流入した。ピョートル時代後のロシアの散文物語文学は西ロシア翻訳物語の伝統に繋がっている。モスクワ土着の伝統は結局十分発達することなく滅んだ。雄弁術はモスクワ・ルーシでもおそらく存在した。司祭長アバクムの作品の文体は確実に雄弁術の特徴を持つ、見かけはシンプルだが、説教の古い口頭の伝統を示している。だが、この伝統は西ロシアにおいて修道士学校とモヒラ・アカデミーによって植え付けられたスコラ哲学的（形式的）雄弁術の伝統との共通点を何ら持っていない。モスクワはピョートル時代よりもかなり前にこのウクライナの布教の伝統を知っていた。ピョートル時代には、著名ではないウクライナ人雄弁家フェオファン・

プロコポビッチとステファン・ヤボルスキーがこの伝統を最終的に定着させた。ピョートル時代以降のロシアのすべての修辞学は、教会のものも世俗的なものも、まさにこのウクライナの伝統に溯るものであり、アバクムの如き分離派指導者の作品の中から探し出せる以外に他の痕跡を残さずに結局消滅してしまったモスクワの伝統には結びつかない。最後に、演劇文学はピョートル時代以前には西ロシアでのみ存在した。モスクワには独創的演劇文学の独自の伝統はなかった。宮廷で上演されたのは、それも非常にまれであったが、ウクライナ人作者の作品であった（例えば、セミヨン・ポロツキー）。ピョートル時代以降のロシア演劇文学は発生上は正にウクライナ演劇の流派と結びついている。このように、ピョートル時代以降のロシア文学は全ての分野において西ロシア・ウクライナ文学の伝統を直接引き継いだものであることがわかる。

まったく同じ状況を他の芸術分野においても我々は目にする。それは音楽の分野であり、（主に教会の）声楽も器楽も、また絵画の分野（大ロシアの伝統は旧教徒にのみ継承された、ピョートル時代以降のロシアの全てのイコン画法と肖像画法は西ロシアに溯る）、そして教会建築も同様である（つまり、ロシア形式としてよく知られる唯一の建築様式）。しかし、西ロシア文化との結合とモスクワの伝統の拒否は芸術だけでなく、ピョートル時代以降の精神文化の全ての面で見られる。ロシア祈祷式の西ロシア・ヴァリアントがすでにニコン総主教時代に唯一正当なものとされ、キエフ・モヒリアカデミーが全ロシア高等宗教教育機関となり、長期間にわたってこの学院の卒業生が高位聖職者の多くを占めていたことから、宗教観と教会や神学に関する思想の潮流は、むしろ西ロシアの伝統に結びついていたはずであった。西ロシア的のものとしてピョートル時代以降の学校、精神的メソッド、教育組織の伝統があった。最後に、ピョートル時代後に定着した旧大ロシア文化への視点そのものはその起源からすれば西ロシアのものであったことは注目すべきことである。ピョートル以前のモスクワ・ルーシ文化については、17世紀にウクライナ人学者が述べた考えを繰り返すのが慣例となっていた（今もなおその慣例があると言える）。

II

このように17世紀と18世紀の境目に大ロシア精神文化のウクライナ化が生じたのである。ロシア文化の西ロシア異種とモスクワ異種との差異はモスクワ異種の根絶によって一掃されたので、ロシア文化は一つになった。

このピョートル時代以降の統一ロシア文化はその起源からすれば西ロシア・ウクライナ文化であったが、ロシア国家体制はその起源からすれば大ロシア的体制であった、そこで文化の中心もウクライナから大ロシアへ移転しなければならなかった。結果として、この文化は大ロシア文化特有でもウクライナ文化特有でもない、共通ロシア文化となった。この文化のその後の発展全体は限定的地方的なものから全般的全国的なものへの移行によって著しく左右された。ロシア文化の西ロ

シア文化異種はウクライナがポーランドの一地方であった時代に形成されたものであり、そのポーランドは文化面ではロマンス・ゲルマンを中心とするヨーロッパの一地方（しかも辺鄙な一地方）であった。だが、ピョートル時代からこの西ロシア文化異種は統一的共通ロシア文化となり、そのことによってロシアの首都文化となった、またそのロシアはこの時代にはヨーロッパの最重要国の一員であることを要求するようになった。こういうわけで、ウクライナ文化は取るに足りない地方小都市から首都へ移転したようなものであった。それにふさわしく、西ロシア文化はこれまでの持ち前の地方的外面を根本的に変えることになった。この文化はポーランド特有のもの全てから完全に脱して、それらすべてを生粋のロマンス・ゲルマン文化（ドイツ、フランスなど）の適切な要素に取り換えようと努めている。同時に、言語的文化基盤も変化しつつある。以前には、西ロシアでは標準的文語の教会スラブ語と並んで、社会上層の会話や実務的言葉として使われるロシア・ポーランド混合語が存在していた。しかし、ロシア文化のウクライナ異種が共通ロシア文化となった後では、ポーランドの圧政と地方色を象徴するこの混合語は、もちろん、存在し続けることはできなかった。大ロシアで支配的となりモスクワ官吏の間で形成された大ロシアの実務的話し言葉は、このロシア・ポーランド混成語の著しい影響を受けたが、それでも最後には勝利して、この混成語を締め出し、大ロシアのみでなくウクライナ上層階級の唯一の実務的話し言葉になった。この言葉と標準語の役割を担い続けていた教会スラブ語の間には、あたかも相互浸透のような緊密な関係が結ばれていた、上層階級のロシア話し言葉は著しく教会スラブ語化し、標準教会スラブ語は著しくロシア化した。そして、結果として両者は同じ現代ロシア語として結びついた。それは同時に標準語でもあり教養のある全てのロシア人の実務的話し言葉でもある、つまりロシア文化の言語基盤となっている。

こうして、大ロシアの文化的ウクライナ化とウクライナ文化の共通ロシア化への変化によって、当然、この共通ロシア文化がウクライナ特有の地方特徴を失う結果となった。この文化は大ロシア特有の性質を獲得できなかった、なぜなら先に述べたように、モスクワ官吏の実務的言葉の継承が維持された以外は、大ロシア特有の文化的伝統の継承は最終的に断固として阻止されたからである。このためピョートル後のペテルブルグ全文化は抽象的な共通ロシア的性格のものなのである。

しかし、抽象的に共通ロシア的なものを強調することは、事実上は、具体的にロシア的なものを排除する結果となった、つまり民族的自己否定につながった。ところで、こうした自己否定は勿論、健全な民族感情の反動を自ら惹き起すはずだった。

偉大なるロシアの名目でロシア独特のもの全てが事実上迫害され根絶された状況において、自らへの抗議を引き起こさぬようにするためのこうした状況は馬鹿げていた。そこで、ロシア社会において、ロシア民族特質の独自性主張と発見を目指す流れが出てきたことは、驚くに当たらない。だが、この流は共通ロシア文化の抽象性に逆らったもので、具体的なものに取り換えようとするもの

であり、それは一定の地方分離主義的性質を必然的に帯びざるをえなかった。より具体的な民族的
外貌をロシア文化に付与しようとするあらゆる試みを行うことは、全ロシア民族の中で、大ロシア
人か小ロシア人かベラルーシ人かのいずれか個別の一つを必然的に選択することとなった。なぜな
ら、具体的に存在していたのは大ロシア人、小ロシア人、ベラルーシ人であり、「共通ロシア人」
は単に抽象化の所産だからである。それに実際のところ、具体的な民族的ロシア文化に有利な流れ
が大ロシアと小ロシアの二つの川床を並行して流れている。注目すべきはまさにこの二つの川床の
徹底した並行関係である。この並行関係は前述した流れのあらゆる現象において目にするることにな
る。例えば、文学の分野では我々は18世紀末から現れ始める、言葉遣いとスタイルの面で故意に
庶民的な一連の作品を目にする。これらの作品を成立させているのは二つの徹底した並行関係をな
す大ロシアと小ロシアの発展である。両者には、初めにパロディ・ユーモアの流派が観察される
（大ロシアではマイコフの「英雄エリセイ」、小ロシアではコトリャレフスキーの「エネイ
ダ」）、その後、民謡に重きを置いたロマンチックで感傷的な流派が見られる（大ロシアの絶頂期
はコリツオフ、小ロシアではシェフチェンコが活躍）。ところで、この流派は19世紀半ばになる
と、世界的苦悩のロシア独特の現れとなった市民的苦難と暴露の流派に移行する。ピョートル時代
以前の古い時代のロマン主義的理想化は、文学や歴史記述や考古学などの分野で見られる、この理
想化は同じく具体的な民族的なものへの要求によって生み出されたものであり大ロシアと小ロシアの
二つの主要な川床において同時に並行していつも登場している。人民主義運動についても民衆への
様々な歩み寄りについても同様のことが言える。あらゆる人民主義者は（現実の具体的な人民認識
を行ってきたのだから）ある程度までは郷土主義者となり、一定の大ロシア特有あるいはウクライ
ナ特有の庶民的特徴または日常生活様式の熱烈な擁護者と必ずなっただけである。

こういう訳で、サンクト・ペテルブルグ時代に具体的な民族的なものへの強い愛着が地方分離主義
の形をとり、あるいはロシア系諸族（大ロシア、ウクライナなど）のある一つに対する個別化志向
を引き起こしたものの、この現象そのものは共通ロシア的なものであった。なぜならこの現象の原
因そのものが全ロシア的なものだったからである。つまり、ピョートル時代以降のロシアにはロシ
ア文化上層と具体的な民衆基盤文化との間に際立った分離があり、この分離によって引き起こされ
た知識人層と人民との間の特別な疎外関係があり、そして人民と知識人層との再統合のノスタルジ
アがあるのだ。そこで、上層文化が民衆基盤から有機的に育つような文化改革の課題、あるいは文
化の新たな建物の建設も共通ロシア的なものである。この問題は現在も大ロシア人の前にも、ウク
ライナ人とベラルーシ人の前にも同じくロシア系諸族全ての前に立ちはだかっている。

III

上で指摘したロシア文化改革問題と関連して問題が生じている。この新たな改革文化は共通ロシア的なものであるべきか、あるいはそうした文化は全く存在すべきではなく、在るべきはロシア系各個別民族にとっての新たな刷新文化なのか、という問題である。

この問題は、とりわけウクライナ人にとって切実さを持って持ち上がっている。この問題は政治的要素と思惑の介入によって著しく複雑化し、ウクライナは全くの独立国家であるべきか、あるいはロシア連邦内で完全な法的権利を持つ一員であるべきか、あるいはロシアの自治地域の一部であるべきかについての問題とたいてい結び付けられている。しかし、当該ケースでは政治問題と文化問題の結びつきはまったく必然的なものではない。我々は、ドイツ系諸民族全てが一国家に統合されていないものの共通ドイツ文化が存在することを知っている。また我々は、他方で、国家主権をずっと前に失ったにもかかわらずインド人が独自文化を保持していることを知っている。そこで、ウクライナ文化と共通ロシア文化についての問題もウクライナと大ロシアとの間の政治的及び国家権力相互関係の問題と結びつけないで検討することは可能であり、そうすべきである。

これまで我々が見てきたのは、ピョートル時代以降の共通ロシア文化は具体的民族志向の文化改革意欲を生むと言った一部大きな欠点を持っていたことである。ウクライナ文化分離主義の熱心な一部支持者は、これまでロシアに存在していた文化は決して共通ロシア的なものではなく、あたかも大ロシア文化のみであったかのように、示そうと努めている。しかし、それは事実と反している。我々がもうこれまで検討してきたのは、ピョートル時代以降に共通ロシア文化の創造の端緒となったのは大ロシアの精神的ウクライナ化であったこと、この全ロシア的文化は系統的にはピョートル以前時代の西ロシア・ウクライナ文化とのみ結びついており古い大ロシア文化とは関係ない、古い大ロシア文化の伝統は17世紀末に断絶した、ということであった。この共通ロシア文化の創造だけでなく発展にウクライナ人も大ロシア人とともに積極的に参加したこと、しかも自らウクライナ民族への所属を拒否せず肯定者の立場で参加した、といった全く明らかな事実を否定することはできない。ロシア文学の中からゴーゴリを削除することはできないし、ロシア史研究史料からコストマーロフを排除することはできない、ロシア言語文学研究からポチェブニャを除外することはできない、等々である。要するに、ピョートル時代以降のロシア文化は共通ロシア的なものであり、ウクライナ人にはそれは見知らぬものではなく、親しいものである、これを否定することは不可能である。従って、もしもこの文化が一部ウクライナ人によって十分に親しいものではないと受け取られていたとすれば、そしてもしもこの文化とウクライナ庶民の宗教的慣習と日常生活様式とを比較した場合に文化上層と民衆基盤との間の不一致が目についたならば、それはウクライナだけでなく大ロシアにおいても同じく見られたことであり、従って、そうした事態が引き起こされたのはその文化が大ロシア的なものであったことによるのではなく全く別の原因によるものである。

おのおのの文化は二つの側面を持つはずである。一つは具体的な民族の民衆基盤を目指すものであり、もう一つは精神的及び知的活動の頂点に向かうものである。文化の耐久力と健全性のためには、第一にこれら二つの側面の間に有機的結びつきの存在が必要であり、第二に二つの側面のそれぞれが実際にその役目を果たすことが必要である、つまり民衆基盤を目指す文化側面は具体的な民族基盤の個性的特徴に適應すること、精神的頂点を目指す文化側面はその発展により民族の優秀な代表者の精神的欲求に合致しなければならない。

ピョートル時代以降の共通ロシア文化にはこれら二つの文化側面、あるいは上層階、下層階における発達は異なっていた。民衆ルーツを目指す下層階文化はロシア諸民族の具体的特徴にほとんど適應してなかったのでその役目遂行は不十分だった。その結果、庶民出身者は、個性をまったく無くしたままで、まさに彼らにとって幾つかの本質的な特徴を自らの中で抑制し喪失したまま文化に接する可能性があった。逆に、高度な精神的活動と知的活動を目指す共通ロシア文化の上層階はロシア知識人層の精神的欲求を十分満足させるほどに発達した。

ウクライナ領内のこの共通ロシア文化全体をもしも新たにわざわざ作られたウクライナ文化に、従来の共通ロシア文化との共通性は何も持たないものに取り換えれば、いかなる事態が起きるか、推察してみよう。ウクライナ住民はいずれかの文化を選ぶことになるだろう。もしも新ウクライナ文化が自らの下層文化を具体的な民族基盤に適應させるのに成功すれば、下層社会はもちろん、この新ウクライナ文化を選ぶであろう、なぜなら、先述のとおり、従来の共通ロシア文化では民衆ルーツを指向する文化側面の発達が極めて乏しく、民族の個別的特徴には全く適應していないからである。しかし、この新ウクライナ文化を下層社会のみでなく専門職能を持つ上層（つまり最も質の高い知識人層）もが選択するようにするには、この文化の「上層階」も今までの共通ロシア文化以上にウクライナ知識人の高度な精神的欲求に適應する必要がある。さもなければ、圧倒的多数の（文化的創造においてきわめて価値・資質の高い）ウクライナ知識人は共通ロシア文化を選ぶことになるであろう、そして自立的ウクライナ文化は最も貴重なこの知識人の協力を得られずに退廃と死滅を運命づけられることになる。

偏見なく可能性を秤にかけて、結論を出すことにしよう。新ウクライナ文化は文化建物の「下層階」を民衆ルーツに適應させる課題についてはおそらく十分に解決できそうであるが、その文化が知識人の欲求を以前の共通ロシア文化以上に満足させる新たな「上層階」の建設といった別の課題についてはまともに解決できる可能性はまったくありそうもない。高度な精神的欲求を満足させることにおいて、新ウクライナ文化が共通ロシア文化と好都合に競争できる状況は出てこないであろう。第一に、その文化は共通ロシア文化が持っている豊かな文化的伝統を持つようにはならないであろう。ところで、そうした伝統に繋がりそうした伝統に立脚していることで、全く新たな文化財を作り出す場合でさえ、高度な精神的価値の創造者は著しく容易に仕事をするので

ある。さらに、高度な文化財創造には創造者の資質選択が非常に大きな意味を持つ。そこで、この文化面の首尾よい発展には、当該文化の担い手である民族全体の人口規模が可能な限り大きくなる必要がある。なぜなら、当該民族の担い手の数が多くなれば、（他の条件を同じくすれば）生まれてくる有能な人々の絶対数も多くなり、第一に文化「上層階」の発展がより強化され、第二に競争がより激しくなる。そして、競争は文化的建設の質そのものを高めることになる。このようにして、他の条件を同じくすれば、民族構成の一部が各自独立して自分のために働きつつ文化創造を行っているケースに比べて、大規模民族の統一文化の「上層階」は常に質的により完璧で、量的により豊かである。偏見のない当該民族全体の代表者は誰でも以上のことを認めざるを得ない、従って、完全な選択の自由があれば、民族全体の一部の文化ではなく（我々のケースではウクライナ文化）、民族全体の文化を選択するであろう（我々のケースでは、共通ロシア文化）。ウクライナ文化を選ぶ可能性があるものは一定の偏見を持った者、あるいは選択の自由が制限されている者のみである。その際、前述のこと全てが高度な文化財の創造者にも消費者、つまり文化財の評価者にも当てはまる。要するに、高度な文化財の創造者は誰でも（もしも彼が実際に才能があり自らの力を自覚していれば）、自らの創造の所産が可能な限り多くの真の評価者に受け入れられ評価されることを目指すであろう。一方、高尚な文化財の真の評価者は誰もが可能な限りたくさんの創造者の産物を利用することを目指すであろう。つまり、双方が当該文化圏の縮小ではなく拡大に関心を持つ。文化圏制限が望ましいとすることがあるとすれば、それは、一つは、競争に反対して自己維持を望む無能あるいは平凡な創造者のみである（真に才能のあるものは競争を恐れない）。他の場合では、最高に洗練された文化そのものを純粋に評価できるレベルにまで達しておらず、様々な文化財が当該地方文化異種の枠内に納まる時のみ評価能力を持つ狭量で偏屈な地方排外主義者である。そうした人々は主として共通ロシア文化に反対して全く自立したウクライナ文化を選択するであろう。彼らはこの新文化の中心的帰依者となり指導者となる、そしてその文化に自らの刻印を残すであろう。それは、平凡さと月並み、反啓蒙主義を祝福するちっぽけな地方の虚栄の刻印である。さらにそれに加えて、常に疑い深く、競争に対していつもおびえている精神である。これらの人々はむろん、共通ロシア文化と自立的ウクライナ文化の間の自由な選択の可能性そのものを様々に圧迫し完全に排除しようとしている、ウクライナ人が標準ロシア語の知識を獲得し、ロシア語の書物を読み、ロシア文化に親しむことを禁止しようと努めている。だが、これでは不十分なことが分るだろう、例えば偽り・中傷を述べ、固有の歴史的過去を否定し、民族固有の聖物を踏みつける犠牲を払ってでも、ウクライナ住民に対して大ロシア人への激しい憎しみを吹き込み、学校・出版物・文学・芸術などあらゆる手段でもってこの憎しみを持続的に保持させようすることになるだろう。なぜなら、ウクライナ人がロシア的なもの全てを憎むことにならなければ、共通ロシア文化に有利な選択がなされる可能性が常に残るからである。だが、前述した環境で創造されたウクライナ文化が

酷いものとなる、ということを理解するのは容易である。この文化は最終目的ではなく政治手段、それも有害で排外主義的敵意を持ち短気でうるさい政策手段になることが判明するであろう。この文化の主要な推進者となるのは文化物の真の創造者ではなく、強迫観念によって催眠術にかかったマニャックな狂信者、策動家であるだろう。このため、この文化においては、学術・文学・工芸・哲学などあらゆる分野のものが独自価値を持たず、客観性のない偏見に満ちたものとなるであろう。偏見のある紋切り型の考えに従順であるために取るに足りぬ榮譽しか得られぬ凡人のために大きな道を開くことになるであろうが、こうした紋切り型の狭量な目隠しによって自らを束縛することができない真に才能ある者を黙らせることになる。だが、重要なことは、この文化が実際に民族的なものになりうるかどうかについて大いに疑念があることである。民族個性精神を文化財の中に十分に具現化することができるのは、ある種の二次的な政治目的のために働くのではなく、不条理な内的欲求のみが原因で働く真に才能ある人である。そうした人材にとって前述の悪意に満ちた排他主義の環境では居場所がないであろう。政治屋に必要なのは主に一つのこと、できる限り早く独自ウクライナ文化を創造することである、ただロシア文化に似てさえいなければ、それがいかなる特徴の文化になるかはどうでもよいのである。それは必然的に大々的な模倣作業を引き起こすことになる。新たに創造するよりも外国から（ロシア以外ならどこからでも）既成のものを取入れ、そうして輸入した文化財に手っ取り早くウクライナ名称を付与した方がより簡単ではないか！結果として、こうした条件下で創造された「ウクライナ文化」はウクライナ民族個性資質の本来の表現とはならないであろう、それは国連で重きをおかれぬ様々な「若い民族」によって大急ぎで創造された「文化」とあまり違うところはないことになる。こうした文化においては、概してあまり重要でもない偶然取入れた庶民生活要素の幾つかを扇動的に強調することが、その庶民生活様式の最深基盤を事実上否定することに結びつくことになるだろう、他方で、機械的に導入され不器用に用いられているヨーロッパ文明の「最新技術」はひどい地方の古着と文化的後進性と並んで生きていくことになるであろう。そして、全てこうしたものは、高慢な自賛、これ見よがしの宣伝、民族文化・民族独自性についての大言壮語によって覆い隠されている精神的内面の空虚さのもとで生じているのである。つまり、それは哀れな模造品、文化ではなくひどい模倣品であろう。

もしも、ウクライナ文化が共通ロシア文化を他文化に挿げ替え、共通ロシア文化排除を望むのであれば、いずれにしても仮に、共通ロシア文化を相手に競争路線に足を踏み込むのであれば、ウクライナ文化を待ち受けている前途は前述のような魅力のないものである。教養あるウクライナ人めいめいが決定せざるを得ないある条件、ロシア人であることを望むか或いはウクライナ人であることを望むかといったこの条件は、ウクライナ文化発展の視座からすれば、文化創造者選択上で極端な不利を否応なく伴うことになる。ウクライナ人はウクライナ文化と共通ロシア文化について（あれかこれかの）ジレンマの形で問題提起することにより、自らの将来文化を前述の魅力のないものと

して運命付けている。このことから、ウクライナ人にとってのこうした問題提起は実際のところ不利ということになる。前述の悲惨な将来を避けるためにウクライナ文化は、共通ロシア文化と競わないで、補足する形で創造されるべきである、他の言い方をすれば、ウクライナ文化は共通ロシア文化の個別的存在になるべきである。

「下層階」つまり、民衆基盤を指向する文化建築物の下層は新たに建設されるべきであり、その建築物においてウクライナ文化は、当然、自らの個性を發揮し得るし發揮すべきであることについて、我々はこれまですでに指摘した。他方、高度な文化財を含む文化の「上層階」においては、ウクライナ文化が共通ロシア文化と競争することは不可能であることも我々は指摘した。このように、ここでは共通ロシア文化とウクライナ文化とのある必然的な領域区分が出来ている。この区分は、もちろん、前述のことにだけにとどまらない、なぜなら、我々が言及した下層階と上層階の他に、文化はさらに中間層の「中層階」をも持つはずだからである。だが、いずれにしても領域区分の原則そのものはこのことによって示されている。

IV

この原則と考え方は、共通ロシア文化とベラルシア文化、大ロシア文化、さらに地方諸文化などの領域区分の基礎とすべきである。なぜなら、前述のように、文化建築の下層階が具体的な民衆基盤に適應しない現象がピョートル後のロシア文化において各地で見られたからである。将来、この欠陥を矯正し、民衆ルーツを指向するロシア文化側面をロシア人の具体的民族個性に合致させなければならない、換言すれば、文化を民衆によりぴったりと適合させ、そのことで庶民出身の人々が文化建設に絶えず参加することを確実にしなければならない。その際、前述した文化側面がロシア民族の具体的個性特徴に適應することになれば、すべてのこの建設作業は各地方及び諸種族地区毎に大いに差別化されるべきは当然である。なぜなら、「ロシア民族一般」とは抽象概念であり、具体的には大ロシア人（北部大ロシア人、南部大ロシア人、白海沿岸ロシア人、ヴォルガっ子、シベリアっ子、コサックなど）、ベラルシア人、小ロシア・ウクライナ人（同じく様々な下位民族を含む）が存在しているのであり、当該各地における文化の「下層階」が、ロシア民族の具体的な当該個別下位民族（ロシア民族個性を持つ各地方の個別的存在）に適應すべきである。そうすることによって、ロシア文化は将来、各地方と各州毎に外見上大いに差別化されるはずであり、以前の抽象的な個性の違いがない制服のような画一性に代って、鮮やかに目立つ各地方色の虹が出現するはずである。

だが、こうした各地方文化の発展に文化的創造活動の唯一或いは主要目的があると考えてるのは大きな間違いであろう。民衆ルーツを指向する文化側面以外に、どの文化にも精神的高みを指向する他の側面も存在するはずであることを忘れるべきではない。この文化側面が十分發達しておらず、

その結果、民族の文化上層階が高度な精神的欲求を自前のものでなく外来の文化財によって満足させることを余儀なくされている文化は実に困りものである。そこで、民衆ルーツを指向する文化側面の開発及び発展と並んで、「上層階」の文化財分野の集中的創造活動を進めるべきである。ロシア文化建築の「下層階」創造活動は元来、前に指摘したように、個別のロシア諸種族と各地方に応じて差異化を要求するとすれば、それとは逆に、ロシア文化の「上層階」創造活動も同じく元来、全てのロシア諸種族の協力を要求するものである。「下層階」創造活動では地方の間仕切りは、文化を具体的な民族基盤へ最大限合致させるために当然であり、必要があるのに対して、「上層階」の創造活動ではその間仕切りは不自然で、無用であり害になる。後者の文化側面の本質そのものが最大限の活動範囲を要求するものであり、従って地方の間仕切り枠によるこの活動範囲のいっさいの制限が文化財創造者にもその消費者にも無用な邪魔物と感じられることになるだろう。この文化側面に地方の間仕切り建設を望む可能性があるのは、競争を怖がる平凡な創造者、そして偏執狂的熱狂的な地方の排外主義者のみであろう。だが、もしも平凡な文化創造者と未熟な文化鑑定人にとって好都合に地方間仕切りが文化建築の「下層階」のみでなく「上層階」においても確立されることになれば、国内各地で、本当に才能ある者と精神的に成長した者すべてが地方から首都に逃れ去ることになり、地元には最終的に文化建築の下層階で働くために必要な創造者もいなくなるほどの地方停滞と月並みなものを尊重する息苦しい雰囲気になるであろう。

そういう訳で、ロシア文化の地方的種族的差異化は文化建築の最上層、最高分野の文化財にまで及ぶ必要はまったくない。将来のロシア文化の「上層階」には、地方的種族的間仕切りは存在すべきではない。この点において「上層階」は、種族的地方的間仕切りが非常に発達し著しく目立つはずの「下層階」と異なることになる。これら二つの階層間の極端な境界は、もちろん、存在すべきでない。一方の階層文化は少しずつ目立たずにもう一つの階層文化へ転じるべきである、さもなければ当該文化は統一システム、つまり、真の意味での文化体系にはならぬであろう。つまり、文化建築の下層部分で著しく目立つ地方的間仕切りは民衆基盤からより高くより離れるにつれて徐々に曖昧になるであろう、さらに文化建築物の最上層ではそうした間仕切りは目立たなくなるであろう。重要なことは、文化的建築物の頂点と基底部の間に絶えず相互作用が存在するようにすることであり、新たに創造された上層階文化財貯蔵物が各地方の下層階貯蔵物の差異化され個性化した文化財創造の方向性を決定するようになることであり、逆に、ロシア各地の個性的存在者の文化的創造活動が互いに合体し、地方独特の個別特徴を中和しつつ、しかし、共通性を際立たせつつ、上層階文化創造の精神性を決定するようになることである。文化建築物の上層と基底部との間の不断の相互作用の要請によって、地方的間仕切りの役割・形態・規模が定まるはずである。それらの間仕切りはあるべき地方的文化の個別化を保障するはずである、だが、文化建築の上層と基底部の相互作用を少しも妨げるものではない。それら全てをきちんと調整するのが不可能なことは、明らか

だ。ある個別的な問題で当該地方間仕切りが高く、別の問題では低くなることもありうるからだ。重要なことは、これら間仕切りの意味が正しく理解されることであり、間仕切りが目的そのものに転化しないようにすることである。

ロシア文化の下層階に地方的種族的差異化が存在しながらも、それでもロシア文化が統一システムであるためには一つの重要条件が必要である。ロシア文化建築の統一的上層階層としての基盤にも、そして下層階のあらゆる地方バリエーションとしての基盤にも同一の組織化原理を定めるべきである。そうした原理となるのは、ロシア民族のいずれの種族的個性存在にとっても等しく親近感があり、民族精神の奥底に植え付けられ、そして同時に高度共通ロシア文化の有能な担い手を対象とする上層階貯蔵文化財にとっての基盤ともなりうるキリスト教正統派信仰（訳者注：以下、正教と訳出）である。かつては、この原則こそが共通ロシア文化の重要な中枢であったことがあり、そのおかげで、ロシア文化の西ロシア地方の個性存在とモスクワ地方の個性存在とが再び合同を成し得たのであった。その後、ピョートル時代以降に特有な、世俗的で神を恐れぬ反キリスト的な西欧文化に盲目的に熱中したことで、ロシア民族の文化的上層階において、先祖の残してくれたロシアの生活基盤を何の代替物で補うこともなく、著しく害し駄目にしてしまった。正教基盤を排斥した知識層の気分が人民大衆の間に入り込んだために、大衆の中でひどい精神的荒廃が生みだされた。だが、優れた一般民衆と知識人はこの精神的空虚を深刻に受け止めた、そこで、しばしば最も異常な形をとる宗教的探究がピョートル時代以降ずっとロシア民族及び知識層の典型的な生活特徴となっているのである。こうした宗教的探究は満足を得ることはできなかった、なぜならロシア文化が実質上宗教の外にあり、国家従属下におかれた教会は文化の外にあった（いずれにしても、高度な共通ロシア文化の主要路線の外にあった）。そこで、宗教探究者は別々に道を歩んだ、そして一部探究者がただ偶然によって正教を発見することがあった。無宗教（従って反宗教）文化の精神的退廃が露骨な形で目前に立ち現れ、絶頂にまで達した現在の共産主義支配時代の体験後には、（神の助けを期待しつつ）必ず断固たる反動が来るはずである。将来のロシア文化は完璧に隅々までキリスト教化するべきである。正教は民衆の日常生活のみでなく、ロシア文化建築の最上層階に至るまであらゆる部分に入りこむべきである。その時になって初めて、個々のロシア人誰もが自らの最も深い全ての精神的欲求の完全な安らぎと満足をロシア文化の中に見出すことになるだろう、その時になって初めてロシア文化は、表面的には地方的種族的差異特徴を持ちながらも、隅々に至るまで統一体系になるであろう。

V

現在、我々はロシア文化の地方的差異化が増加する状況下に居合わせている。特に、ウクライナでは、まさに文化的分離主義の気運が著しい。このことはかなりな程度、ソビエト政権の文化的分離主義黙認政策によって説明できる。それによって、さらに最も有能なウクライナ知識層の大部分を文化創造上の重要な役割から排除することによって政治的分離主義を鎮静させるためである。他方で、何百年ものカトリック精神への執着・ポーランドへの隷属状態・オーストリア・ハンガリー統治下において常に特徴的であった地方分離主義民族闘争（より正確には言語闘争）により民族自意識が全く損なわれたガリツィア知識層の多数がウクライナ領に流入したことによって説明できる。ウクライナ住民に関して言えば、ある一定層はウクライナ化によって個性化することよりも、むしろ、この動きは見たところ共産主義モスクワからの分離を支持しているようだ。と言う訳で、ウクライナの文化的分離主義は住民の一定グループの反共産気運（ソビエト用語ではプチブル気運）を活力源としている。だが、この機運そのものは論理的には文化的分離主義とは全く結びついておらず、例えば、旧体制では、全く逆に、中央集権主義の支柱の役目を果たしていたのである。これら全てのことに結びつくこととして、全ロシアの一体性が最も強く発揮されうるはずの上層階級の文化創造活動が今や困難な状況がある、文化財創造を他人にまかせようとせず、同時にいくらか高度な精神的欲求を満足させる高度文化財を創造する能力を自分自身持たない共産主義の政治支配のために文化創造が人為的に制限されているのである。だが、ウクライナ化に熱中するのはもちろん主に、目新しさの魅力、そして長く抑圧され地下室に追いやられてきたウクライナ熱狂家に完全な行動の自由が突然与えられたことによって説明できる。とにかく、この分野では現在、疑いなく、多くの奇形が見られる。ウクライナ化はある種の自己目的に転化し、民族の努力を不経済で無駄に浪費している。将来的にはもちろん、現実が修正を加え、ウクライナ化運動から文化的分離主義の偏執的熱狂者がこの運動に持ち込んだ滑稽な要素を取り除くであろう。熱狂的民族主義者によって創造されたものの多くは滅亡と忘却の運命にある。だが、大ロシア文化と合致しない特別なウクライナ文化を創造する正当性そのものにはもはや否定の余地はない。民族的自意識の正常な涵養はこの文化の未来の創造者にその必然的境界と、共通ロシア文化の特別なウクライナの個性存在であるといったその本当の本質と本当の課題を示すことになるだろう。その時になって初めて、ウクライナにおける文化創造は、真に優れたウクライナ人が参加（恐怖のためでなく良心のために）しうるといった性質を持ち始めるであろう。こうしたことが生じるとすれば、それはウクライナ（同じくロシアの他諸州、ユーラシア）民族の生活基盤に、利己主義的本性と生物的個体の露骨な自己肯定を放任しておかず、個人的そして民族的な自己認識としての文化の優位性をおくときである。こうした理想のための闘いに参加するよう、ユーラシア主義は全てのロシア人、大ロシア人にもベラルシア人にもウクライナ人にも呼び掛ける。

- 注1：これら全てのケースでは「西ロシアの」と言った方がより正しいのであろうが、「ウクライナの」「小ロシアの」と言うことにする。この時代は、西ロシア社会の（文化面の）上層階では、小ロシア人とベラルシア人との差異は生じていなかった。
- 注2：ピョートル以降時代のロシアの建築、絵画、彫刻における西ロシアの伝統に関しては、サビツキーの論文「ロシア文化における大ロシアとウクライナ」（雑誌『ラドノーエ・スローヴァ』1926年、No.8）におけるコメントを比較せよ。
- 注3：ベラルシアの路線も同じく常に存在していたが、常にあまり発展していなかった。
- 注4：簡潔さのために、ロシア種族あるいは領土の最も大きな二つの部分についてのみ至る所で言及してきた。しかし、類似現象は（あまり集中的ではないものの）、他のより小さな部分としてのベラルシア、様々なコサック州、シベリアなどでも起こっていた。
- 注5：誤解を避けるため、「上層階」と「下層階」の表現にはいかなる評価要素も含まないことをあらかじめ説明しておく。これら階層のどちらがより価値があるのかについての問題解決を望まぬだけでなく、そうした問題提起の正当性そのものを全く否定する。「上層階」と「下層階」とのタイプがここで表現しているのは文化の完成度の違いや価値ではなく、二つの異なる文化機能のみである、他方価値と完成度はこれらの機能にではなく、創造者が働いているのが「上層階」なのか「下層階」なのかにはまったく関係なく、彼の才能に左右されるのである。コリツオフの詩作品はベネディクトの作品よりもはるかに美的で優れている、ところでコリツオフは下層階で、ベネディクトは上層階で働いている。
- 注6：この西欧文化が概してキリスト教的であったのは（或いは、少なくとも望んだのは）中世時代のみであった。いわゆるルネッサンス以来、西欧文化は自らをキリスト教に対置させた、そしてまさに教会に、また結局あらゆる宗教全般に対置した西欧文化の形態が、ピョートル後の欧化したロシアによって摂取された。

<解説>

翻訳には『Николай Трубецкой Наследие Чингисхана』, Москва, АГРАФ, 2000 に掲載の論文「К украинской проблеме」p412-434 を使用した。初出は、1927年に刊行された『ユーラシア通報 第五号』に収められている。

この論文は、ウクライナの民族文化について、政治的分離主義と結びついたものとして、批判的に論じた内容である。現在独立国家として主権を持つウクライナであるが、時代をさかのぼれば、現ウクライナ領のいくつかの地域はそれぞれ独自の歴史を歩んできており、それぞれの地域に住む人々のアイデンティティ、文化にはかなりの差異が存在する。リヴィウを中心とする西ウクライナは、15世紀以来何百年もの長期にわたってポーランドの支配下にあり、その後はオーストリア・ハンガリーの支配下にあり、その強い影響を受けてきた。他方、ロシアと国境を接する北東部と東部、さらに南部はロシア人居住者割合が多くロシア文化圏と言ってもいいほどである。両者の文化的差異は、特にことばと宗教面に反映している。

帝政ロシア時代には、ロシアとは大ロシア（モスクワを中心とするロシア）、小ロシア（現在のウクライナ）、ベラルシア（白ロシアともいう）を含めての総称を意味していた。ロシア人はキリスト教正統派の信者であり、教会スラブ語を基としたロシア標準語の話し手であるといった共通文化の担い手と見なされ、ロシア皇帝のもとロシア臣民と認められ国家勤務を認められていた存在であった。だが、ロシア人、ロシア文化なる語は抽象的な意味しか持たず、具体性がなかった。

トルベツコイの文化論は独特である。彼は、文化を建築物になぞらえて、下層文化と上層文化に区分する。下層文化は一般民衆が担い手であり、民衆的基盤を指向するものであり、居住地域の自然条件の制約により住民の生活様式にも差異が明確に反映するのが特徴であるが、上層文化の担い手は知識人層であり高度で普遍的な精神的高みを目指すのが特徴で地域差や住民差は乏しいものと考えている。つまり下層文化は、モスクワ文化、シベリア文化、西部ウクライナ文化、クリミア文化などバリエーションがあるのが自然であるが、上層文化は宗教、芸術など精神文化であり地域差はほとんどなく普遍的なものを目指す共通ロシア文化だと見なす。そこで、ウクライナ文化がモスクワ文化と異なるのは、下層文化では自然であるが、上層文化でもウクライナ独自のものを創造しようとすれば共通ロシア文化から疎遠な外来のものを借用して作り出すことになる、それでは上層文化の担い手や消費者は満足できないであろうと批判的である。トルベツコイは、上層文化と下層文化の関係について、普段の交流が維持されること、中層文化が存在することで、上層と下層の極端な格差がないことが望ましいと考えている。

トルベツコイのユーラシア主義関連の論文は何十点かあり、一冊の書物にまとめられている。彼の論文を理解するには、もちろん彼が亡命者として過ごした1920年代初期から1930年代末期までの

ウクライナ問題に寄せて

国際社会の動向、東欧における時代社会、彼自身の社会的立場、ロシア革命後誕生し国際的に認知されるようになったソビエト国家体制下で起きていた出来事、ウクライナ自治や独立にかかわる事柄などを知っている必要があることは確かであろう。だが、他方でトルベツコイの理論、考え方は一般的、普遍的な内容をも含んだ視点があるので興味深く、訳出の興味もあるのである。